

2019年7月31日(水)

老球の細道495号

7月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

毎朝孫たちと家の周囲に出没するダンゴ虫を探すのが日課になった。私が幼少の頃は色々な昆虫が身近にいて虫取り網、かご等をもって追いかけたものである。カブトムシやクワガタ、オニヤンマなどは孫たちに実物をとって見せたいのだが、ついぞ100円ショップのおもちゃでお茶を濁すしかないのが残念である。

ようやく暑くなってきた。朝と夜の命の水「コーヒー」と「ビール」で乗り切る。

1・テレビから

◆「1人の人間にとって小さな1歩だが、人類にとっては大きな飛躍だ」〈アポロ11号月面着陸成功から50周年〉

アメリカの宇宙船アポロ11号が人類で初めて月面着陸して今年で50年になる。その時の船長アームストロング氏が発した歴史的な名文句である。そしてまた、この日を境にして当時高校1年生だった私は〈人生ーバスケットボール=0〉の日々を送るようになる。

◆「世界のトップになる人は、生まれつきの才能はその一部でしかない。最も影響力の大きいのは親の熱意である。親が子どもの小さい頃の才能に気づき、実際はそれほどでもないのだけれど、才能があると信じ込み、それに特別の訓練をほどこすことである」〈NHK放送大学・才能と教育〉

子どもの才能は大人のピグマリオン効果によって開花させられる。古くは「孟母三遷」。最近では3人の子供を東大に現役合格させた母親は幼少の頃絵本1万冊を読み聞かせしたという。「育児なし」だった私は孫に「ダンゴ虫取り」を教えながら今後の戦略を考える。

2・読書から

◆「スポーツの世界でも歴史認識のない思考はありえない」〈中村敏雄著『メンバーチェンジの思想』平凡社〉

バスケットボールが誕生して128年になる。このスポーツをプレイする人は増えているが、このスポーツをどこで、誰が、どのようにして創り出したのかを知らずにプレイする人は非常に少ない。歴史を知ることでもっと深くこのスポーツを楽しむことができる。

3・新聞、雑誌のコラム等から

◆「両親が自己を教育するのでなければ、子どもをひととおり教育することは不可能」〈朝日・折々のことば・フランス哲学者アラン〉:

教員になってから、アランの言葉「教えるとは希望、夢を語ること、学ぶとは誠実を胸に刻むこと」はずっと座右の銘にしてきた。親子のみならず、指導者自身が夢を語り、謙虚に学ぶことを続けなければ選手の心を揺さぶることは不可能であろう。

◆「夢を追いかけることと、途中で燃え尽きないこと。バランスが大切で、かつ難しいのは、どのスポーツも変わらない」〈朝日・天声人語〉

高校野球で160キロ超を投げる大船渡高校の佐々木投手の決勝戦欠場が注目を浴びている。佐々木投手には明日があるかもしれないが、他の選手たちには一生に一度のチャンスだったかもしれない。他の選手の気持ちはどうだったのだろうか。監督、指導者には選手の人生を左右しかねない決断を迫られるときがある。